アブラル・カリムッリン著
タタール人　エトノスとエトノニム

小松　久男

近年、ソ連邦を構成する諸民族の間では、それぞれの民族の歴史や文化を見直し、再評価する動きが顕著である。これは中央アジア諸民族の場合も例外ではない。とりわけ現代の民族問題の深刻さは、心ある研究者や作家たちの関心を中央アジア近現代史の再検討に向けさせている。近い将来、これまでの一面的な解釈や評価、歴史研究上のタブーは、個々に真摯な研究の俎上に乗せられることであろう。自らの論理や認識を率直に語り始めた彼らの言葉には、ナショナリズムの色彩とともに、深い問いかけがあふれていることが多い。本書も最近のこうした潮流に属している。

著者のカリムッリン氏（一九二五年生）は、一九六四年以来、ソ連科学アカデミー・カザン支部・G・イブラギモフ言語・文学・歴史研究所の研究員を務め、文献学博士、ソ連作家同盟会員、タタール自治共和国科学功労者などの肩書をもち、『タタール語書籍の起源』（一九七一年）をはじめとする革命前のタタール語書籍・定期刊行物に関する書誌学研究で広く知られている。しかし、氏の問題関心はひとりタタールにとどまらず、トルコ学の広範な領域に及んでおり、その博覧強記は本書の中にも遺憾なく発揮されている。なお、一九四三年から今日までに氏の公刊した著書・論文は三六〇点を優に越え、一九八五年には氏の著作目録が刊行されているほどである。本書はそのスタイルからみると、専門的な研究書というよりは教養書といったほうがよいかもしれない。著者はタタール民族（エトノス）の生成と民族名称（エトノニム）とに関するこれまでの学説や言説の要点を紹介しながら論を進め、著者のオリジナリティーは、新しい事実の発見や証明よりはむしろ独自の解釈や発想、仮説の中に見いだされるからである。しかしそれゆえにこそ、本書は現代中央アジアの知識人のナショナリズムの一面を率直に表現することになった。本書を紹介する理由もここにある。

さて本書の構成は次のとおりである。原書に章の番号はないが、便宜上これを付けておくことにしよう。

はじめに

第一章　タタール人の起源に関する学術会議の総括
第二章　「タタール人」という呼び名の起源、誰をこの名で呼んだのか
第三章　現代タタール人の祖先について
第四章　ボルガ中流域におけるブルガール
第五章　民族名称の歴史から
第六章　「タタール人」という名称と「ブルガール」という民族名称
第七章　現代タタール人はどのように自称しているか
第八章　「テュルク」、「トルコ」、「タタール」、「ムスリム」という名称への対処
第九章　ボルガール、バルカル、ブルガール
第十章　異名「タタール人」の根強さについて
補論　「タタール」-ブルガールの生活と文化
結論
あとがき
文献目録抄

第二次世界大戦に従軍した著者は、タタールという名前が東欧諸国の人々の心になお恐怖と戦慄とを呼び起こさせる事実を目撃する。ヨーロッパ人に限らず、現代のロシア人も「タタール」と聞けば十人中九人までが、かのタタール-モンゴルの襲来を想起するという。一般の人々はもとより、かなりの教養人であっても現代タタール人はモンゴル侵略者の末裔だと考えているのである。こうした歴史的な誤解は一朝一夕に解かれるものではない。しかし、それはタタール人へのいわれなき憎悪や敵意を温存させる一方で、タタール人の苦い憤激を誘わずにはおかなかった。本書の目的は、このような誤解を生んだ原因と背景とを考察し、この不合理な偏見の克服をはかることにある。以下、本書の内容を簡単に紹介してみよう。

「タタール」という民族名称にまつわる誤解は、タタール人の歴史の歪曲に道を開きかねなかった。戦後間もない一九四六年四月二五―二六日、ソ連科学アカデミーの主催によりモスクワに開かれた学術会議は、現代タタール人の起源に関する問題を討議する。これには三つの説があった。第一は、現代タタール人、つまりカザン-タタールを十三世紀にロシア・東欧を征服したタタール-モンゴルと同一視する説、第二は、これをボルガ中流域のフィン-トルコ系種族とモンゴル人征服者との複合体とする説、そして第三は、これをモンゴルからは「タタール」という名称をもらっただけの、ボルガ-ブルガール直系の子孫と考える説である。金帳ハン国史の研究で知られるヤクボフスキーやグレコフらの参加したこの学術会議は、歴史学、考古

学、民族学、比較言語学など、あらゆる観点からみて第三の説の正しさを確認した。その後の研究、とりわけハリコフらタタール人研究者の労作もさまざまの分野でこれを実証してみせた。タタール人の起源問題はあらゆる面で解決され、誤った民族名称とは永遠に決別するかにみえた。しかし少部数の学術出版では、根強い偏見と惰性の力とを打破するにはあまりにも非力であった。ロシア史の叙述の中ではいまだに旧説がまかりとおり、トルコ系諸民族の歴史に疎い研究者たちは、配慮を欠いた記述によって読者を無用の混乱に陥れ、ときには誤解の再生産を行うありさまなのである。（第一章）

「タタール」という名称はいったいどこから生まれ、そしてだれをこの名で呼んだのであろうか。言葉の起源については諸説あるものの、多くの論者はこれを五世紀の中国人がモンゴル系の一種族に与えた「韃靼」に求めている。やがて中国の史家は、かれらに多くの災厄をもたらした「北方の蛮族」の総称としてこの名を用い始め、それはアジアからヨーロッパへと伝えられた。モンゴル軍がヨーロッパを襲ったとき、モンゴルのタタール部はすでに滅亡していたが、この「蛮族」の名称は中世ヨーロッパ人の知っていた伝説の「地獄の民」タルタルと容易に結びついた。中国と同じく自己中心的な世界観をもっていた中世ヨーロッパ、とくにキリスト教聖職者たちが、ユーラシアのトルコ系諸民族をひとしくタタールと呼び、これを「野蛮な」モンゴル人の子孫とみなすのに多くの手間は必要ではなかった。十九世紀ロシアの優れたトルコ学者ラドロフらはこのような誤った用語法の弊害をいち早く見抜いていたが、中世以来の固定観念は容易には揺るがなかったのである。（第二章）

現代のタタール人がボルガ-ブルガールの直系の子孫であるとすれば、当のブルガールとはいったい何者であったのか。かつて遊牧民ボルガールの起源を論じた研究者たちは、いわゆる「ボルガール汗名録」の記述に依拠しながら、テュルク説、フン説、スラブ説など相互に異なる結論を提示したが、五世紀ころボルガールがテュルク語を話す種族であったという点では一致している。ここでボルガールの前史に分け入った著者は、歴史家エレメーエフやカザフ作家スレイメノフらが提出した大胆な仮説に惹かれてゆく。前者によれば三―四世紀のアナトリアにはすでにテュルク系種族が少なからず居住しており、後者によれば古代シュメール文明の地域には原テュルク系種族が住んでいた。それはシュメール語の中に見出されるテュルク語の要素から判明するという。著書は古代のアジアからヨーロッパへの壮大な、しかし未解明の民族移動の波の中にボルガ

ールの始祖を求めるかのようである。一方、ボルガーブルガールとは六世紀末、北カフカースから黒海北岸地域にかけて成立した大ボルガールの分派であり、この大ボルガールが同じテュルク系のハザールの攻撃によって崩壊した後、八世紀にボルガ中流域に移動した集団にほかならない。しかしかれらが温暖なドナウ地方に進まず、あえて寒冷な北方に移って定着したのは、そこにすでにかれらと密接な関係をもつ同族が居住していたからではなかろうか。（第三章）

先進的なアラブ-イスラム文化を受容し、東西および南北貿易の中継地として繁栄したブルガールの歴史はよく知られている。この間、かれらのエトノスはブルガールとしての均質性を増しこそすれ、近隣のフィン・ウゴル系あるいはスラブ系種族との混合によって変質することはほとんどなかった。ブルガールは自前の国家と文化とをもっていたからである。事情は懲罰と徴税以外の活動をしなかったモンゴル人の支配下においても同様であった。モンゴルの統治は、やはりその支配を受けたイラン人、グルジア人、アルメニア人と同じく、ブルガールのエトノスに変化をもたらしはしなかった。しかし、後世のロシア史家は十五世紀のカザン-ハン国（一四三七―一五五二）の成立をもって、ブルガールのエトノスと民族名称とを突如「タタール」のそれに変えた。金帳ハン国のウルグ・ムハンマドが四千人の戦士を引き連れて新市カザンのハン位に就いたとしても、これではたしてブルガールのエトノスを変えることができたのであろうか。答えは否である。同時代史料や最近の研究は、カザン-ハン国期においてもブルガールがそのまま同じ地域に住み続けていたことを証明している。しかし、かれらはその民族形成においてより激しい経験したはずのロシア人やイラン人と異なり、自己とは無縁の名称を与えられることになるのである。（第四章）

第五章は民族名称一般の概観であり、エトノニム成立の多様性、とりわけ他称に見られる偶然性や恣意性の事例を検討し、最近のエトノニム分類の試みを紹介する。

カザン-ハン国は実在しない「タタール」によるブルガールの征服や根絶によって生まれたのではない。ブルガール語はカザン-ハン国の前後を通してその堅牢さを示している。ブルガール語も自然な変化は経験した。アラビア語やペルシア語の影響は顕著であり、後にはロシア語の影響も現われた。しかし、これらは同意語を増やすにとどまり、ブルガール語の文法構造や音声組織を変えるものではなかった。スレイメノフも指摘したとおり、テュルク諸語の歴史的な不変性は印欧諸語と際だった対照をなしている。たとえば、十一世紀のカーシュガリーが記録したブル

ガール語の詩句は、現代のタタール人も容易に理解することができる。これにたいして『イーゴリ軍記』のテキストを現代のロシア人は読めるだろうか。現代タタール語はブルガール語の直系であり、八―九世紀の言語と基本的な相違はない。では、ブルガールとその言語はいつから「タタール」と呼ばれるようになったのか。これを決定したのは、かれらの支配民族の意志である。ロシア革命後、帝国内の諸民族に与えられていた侮蔑的な異名はそのほとんどが廃止された。「小ロシア人」はウクライナ人、「サルト人」はウズベク人となったのである。タタール人はこの例にもれた。しかし、五百年以上にわたって「タタール」という名称を強要されながら、ブルガールの自称が人々の意識から消え去ることはなかった。（第六章）

『ソビエト歴史百科』の説明によれば、タタール人は自らの意志でその名を選びとったかのようにみえる。第一次史料と民族の記憶とに照らして、これは事実であろうか。ブルガールには祖先を九世代前まで記憶する不文律があった。多くの家族はこれを系図として残したが、これらはブルガールと現代のタタールとのつながりを明白に語っている。十二世紀から十九世紀まで、タタール-ムスリムの著述家たちは「ブルガーリー」や「ブルガルルク」という自称を何回となく使ったものである。民衆がモンゴル人を異族「タタール」とみなし、これを自己と区別した証左は、フォークロアの中に豊富に見いだすことができる。曰く、タタール人は父親すらも売る、と。「タタール」が自称であったなら、はたしてかくも自虐的な諺が生まれえただろうか。偉大な歴史家メルジャニー（一八一一―八九）もブルガールからの歴史的、文化的な連続性を証明している。しかし一八世紀以降、ロシア史の文献ではタタールとモンゴルとの同一視が市民権を獲得する。十九世紀後半から二〇世紀初頭にかけて、この同一論が一世を風靡するには御用学者たちの功績が大であった。カラムジンやチェルヌイシェフスキーらは両者の違いを明確に理解していたが、巷間に流布していたのは御用学者の恣意的な俗説であった。タタールの傑出した啓蒙家ナーシリー（一八二四―一九〇四）ですら、ロシア人に対しては「タタール」を自称として用いざるをえなかったのである。一九〇五年革命後、タタールの知識人は『シューラー』などの雑誌を使って民族の起源論争を展開する。かれらの多くは押しつけられた名称を拒否して、自称を回復することを主張した。一部のブルジョワ・ナショナリストは、モンゴルの「功業」にあやかろうとモンゴル起源説を唱えたが、この砂上の楼閣は広い支持を得るには至らなかった。（第七章）

帝政の末期、他称の「タタール」を嫌ったタタール人の

間には「テュルク」や「ムスリム」を民族の自称とする動きがみられた。「テュルク」はタタール人とほかのトルコ系諸民族との親近性を明示し、「ブルガール」の難点、つまりブルガリア人 Bolgar との混同のおそれや他者にとってのなじみのなさも解消されると考えたのである。しかし、専制と正教会のイデオローグはこれを「パン・トルコ主義」、「パン・イスラム主義」の政治運動とみなし、この「危険な」イデオロギーにたいする闘争に着手する。かの「汚れたタタール」がいままたロシア民族と玉座、そして正教会を脅かしている、と。こうした大衆宣伝は、民衆の関心を革命や社会問題から民族間の不和にそらせ、体制の温存に寄与するはずであった。ムスリムにたいする卑語「バスルマン」には、忌まわしいモンゴル侵略者の末裔への敵意のニュアンスもこめられていたにちがいない。タタールの社会・文化運動も、いわれなき中傷のために多大の痛手を蒙ることになる。タタール人の自称回復の闘いは、進歩的かつ正当な運動であった。マクロのエトノニムとしての「テュルク」も、宗教的な帰属を意味する擬制のエトノニム「ムスリム」も、タタールにとっては自然な自称であった。これらはソビエト期の野卑な社会学者たちが弾劾した「パン・トルコ主義」や「パン・イスラム主義」とも無縁の名称なのである。（第八章）

第九章で話は古のボルガールに戻る。七―八世紀に瓦解した大ボルガールの遺民はどこへ消えたのであろうか。著者は、ハザール、ペチェネーグ、キプチャク（ポロベツ）など大ボルガールとほぼ同一の地域にみられた諸勢力の興亡を、テュルク系種族の連合の組替えととらえ、連合の盟主が交替するたびに全体の名称も変化したと考える。そして、ブルガールと現在北カフカースに居住するカラチャイ、バルカル、そして現代のタタールは、すべて古代のボルガールを共通の祖先とする、と推定する。

ブルガールは十六世紀のなかばモスクワに征服された後も、ロシア統治に頑強に抵抗し、旺盛な活力と自尊心とを失なわなかった。ツァーリと正教会が、かれらを「聖なる」ロシアと正教との敵に仕立て上げ、かれらに侮蔑と敵意をおびた名称を付与したのはこのためである。帝国の膨張につれて、ロシアはクリミア、カフカース、中央アジアの諸民族にも「タタール」の名を与えたが、これは東方への進出をタタール=モンゴルにたいする復仇として正当化することになった。ヨーロッパにおける誤った「タタール」像は、こうしたロシアの用語法によるところが大きい。モンゴル軍と果敢に戦ったブルガール、すなわちタタールをモンゴルと同一視する論調はロシア革命の後衰え始めたが、独ソ戦の開始は古い伝統を蘇らせた。戦意高揚の

ためにタタール−モンゴルとの英雄的な戦いが想起されたとき、タタール人の新しい苦難が始まったのである。両者の混同はペレストロイカの今日においても終焉してはいない。誤ったエトノニムはトルコ系諸民族の歴史研究にもさまざまな困難をもたらしてきた。著者は、とくに現在のチュワシをブルガールの直系と考える説にたいして批判的である。（第十章）

補論では、革命前のタタール人の生活文化を観察したロシア人の記述を紹介する。ピネーギンが近代タタールの識字率を八〇％と見積ったように、かれらの評価は概して高い。しかし、これらは偏見に満ちた文献の奔流にのみこまれ、もっぱら「醜悪で未開なタタール人」のイメージが流布されたのである。

本書の目的はタタール人の起源を考察することではなく、「タタール」という人為的な民族名称の歴史をたどることであった。結論は、ボルガ中流域・ウラル地方のタタール人の自称は「ブルガール」である、という一文に集約されている。著者は「タタール」という用語を扱う歴史家や評論家、教科書執筆者に、誤解を招かぬ慎重な叙述を求めてやまない。ロシア語で書かれた本書は明らかにタタール人以外の幅広い読者を想定している。「タタール人」はいまだに「運命のいたずら」がもたらした歴史的な偏見から解き放されてはいないのである。あとがきによれば、本書は一九七〇年代の末にはすでに完成していたが、当時の政治環境は民族の問題を率直に提起したこのような著作の刊行を許さなかったという。著者は現行の「タタール」を「ブルガール」に改称すること、また「タタール」をそのままに残すこと、そのどちらにもくみせず、これを読者の判断に委ねている。しかし、いずれかの民族が「タタール人」という言葉を将来ふたたび差別のニュアンスをもって口にする可能性を否定してはいない。アインシュタインのひそみにならって著者は言う。このエトノニムについて何百万人という人々の意識に宿る偏見を除去することは、原子を分解するよりもむずかしい、と。

本書はタタール人本来の民族名称を求めて中央ユーラシアの歴史に分け入りながら、きわめて現代的な問題を提起している。タタール人の民族形成のプロセスについては、著者自身が認めるとおり、さまざまの異論や批判が出されるにちがいない。民族形成という歴史学、民族学、言語学、考古学、人類学などの複合的なアプローチを必要とするテーマが、一人の研究者、しかも書誌学の専門家にとって過大な仕事であることは明らかである。本書の価値は、なによりもタタールおよびロシア史の展開に即して「タタ

ール人」という名称のはらむ問題性を解きあかしたところに認めるべきであろう。本書はロシアのオリエンタリズム、すなわち帝国以来のトルコ系ムスリム世界にたいする特定のバイアスをもった認識体系の告発と解釈することもできる。これはスレイメノフの大胆な歴史解釈と通底しているのかもしれない。その意味で、次にはロシア人とタタール人との相互認識のありようを著者の得意とする近代思想史の領域でより詳細に検討していただきたいものである。いずれにしても、五世紀来の偏見に正面から挑んだ著者の知的な努力には敬意を表さずにはいられない。

本書の刊行から二年後の一九九〇年八月三〇日、タタール自治共和国最高会議はロシア共和国から自立したタタール共和国の主権宣言を行なった。自立の道を歩み始めたタタール人がかれらの民族名称にどのような判断を下すのか、今後に注目したいと思う。

Абрар Кариму́лин, Татары: этнос и этноним, Казань, Татарское книжное издательство, 1988, 128 стр.

ホセイン・ソルターンザーデ著
イランにおける都市と都市集住の歴史入門

羽田　正

I

著者、ソルターンザーデ氏は、主として社会学の立場から、イランの歴史的諸現象を分析している在野の研究者で、本書以前に既に、『人間、生産、所有権』（一三五八／一九七九―八〇）、『イランにおける都市、宗教的中心の形成過程』（一三六二／一九八三―八四）、『イランにおけるマドラサの歴史』（一三六四／一九八五―八六）という三書を著している。序によると、著者は、この一連の著作の四番目として、ある一つの歴史都市研究を予定しており、本書はその入門として書かれたが、入門としては少々長すぎるので独立の形で出版されたという。内容を紹介する前に、まず目次を示しておこう。